「国語の力」の成立過程 Ⅷ

―国語教育学説史研究―

野地潤家

一〇

「国語の力」一　解釈の力　のうち、一八　帰納的批評法

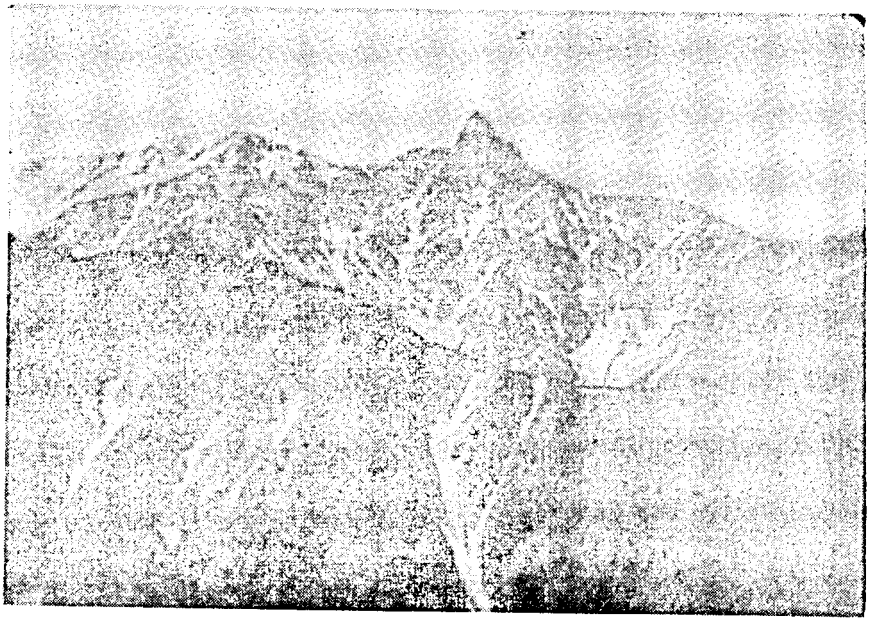
「嘗つて日本アルプスの麓の町で聞いた、その町の山岳写真の名人の話も尊い話であった。山岳の常として、雲霧の走ること定めなく、其上に紫外線の妨げも加わりて山の皺まで写し取ることは至難の業である。それ故にいかに写真術の名手も山岳の写真を撮ることは難しとするのであるが、この人は克く雲霧の絶え間を見はからい、紫外線を巧に避けて、山骨を撮しとる妙技を会得されて居るので、貴人へ献上する山岳写真を撮る時には、常にこの人が召し出されるということであった。瞬間を直視して機微を捉える心の作用は、口で語り形を示して伝えられるような浅はかな心境ではない。唯体験の累積からのみ自得せらるゝ力であるといわねばならぬ。文を読む時の心も少しもこれと異ることはない。文字の連りの上から、ともすれば妨げられ易い錯誤の雲霧や、心の据え方が過まって居るために過まられ易い臆測の紫外線を避けて、文の真相を捉える力は、真実を愛し道を求むる心の凝集と不断の精練に依りてのみ導かるゝものであるといわねばならぬ。」（有朋堂版「国語の力」、四九～五〇ぺ）

この「山岳写真の名人」（長野県大町の斎藤氏）のことについては、雑誌「コトバ」（第三巻第八号、昭和八年八月号）に載せられた、「丘上雑記」に、つぎのように述べられている。

「（前略）名人の体験を聞くことを何よりも悦ぶ自分は、もしよい機会が恵まれるならば、氏に就いて親しく話を聞いて見たいと思ったこともあった。それから十年の月日が過ぎて居る。六月（引用者注、昭和8年6月）に長野県の上田へ行った時、知人からその写真を贈られた。その時に斎藤氏は昨昭和七年に逝去せられたことを聞いて、一層しみじみとこ

の山の姿に見入ったのであった。特に深く心を打ったのはこの知人がこの写真を自分に手渡しする機会を得られるまでに既に八年を経て居ると語られたことであった。この長い年月を心にかけて今直接に手渡ししてくださる心もちが、更に強く心の底まで響いて更に手にした山の姿に見入った。稀にしか遇うことのできない静かな和やかな気につつまれつつ、これを長く記念するために、この写真をここに挿むことにしていただいた。

何処へも話しに行かないと決意してから数年を経た。久しぶりで大町へ行くことにした。会う人ごとに旧知の方々である。それに木崎湖畔で小休みした宿の座敷には藤村作博士の書かれた額が掛けてある。ここは毎夏藤村博士や高木君久松君などの来られるところだと思うと、急に久しく会わない諸氏を懐しく思って絵はがきを取寄せて所懐を書いたが、それは郵便に出してもらったかどうだったかはっきりしない。始めてここを訪ねたのは大正十年の初冬だったと思う。もう初雪がちらちらして、今年は雪が早いと語られたことも思い出す。寂しい山につつまれた、水の流れも身にしむような静かな寒い町の姿が目の前に浮かんで来る。『国語の力』に書いたことのまとまったのはその頃であった。すべてにつけて信州の山水は深く魂の底に刻みつけられて居る。篠井で上田行の汽車に乗換えようとして、プラットフォームを急ぎて歩い



て居ると、同じく急ぎて長野行の汽車へ乗ろうとする知人に遇って、忙かしく無事を語り合い、汽車の出るのを少時間見送った。待合室へ出るとまたここでも知人に遇う。まるで故郷へでも帰ったような気がする。ヨーロッパの旅から帰ってからももう十五年にもなる。信州へはその年から度々来たが、久しぶりで来て見ると、軽井沢を往来する間に成った思索の糸をたどって、いろいろのことが思いおこされる。」（同上誌、八一～八二ページ）

この「丘上雑記」には、上田で知人から贈られた、斎藤氏撮影の山の写真が掲げてある。

右の回想による記述によって、「国語の力」の胚胎期に、大町を訪ねて、この話を耳にされたことがわかる。大正一〇年（一九二一）初冬から大正一一年（一九二二）早春にかけて執筆された「国語の力」に、この山岳写真の名人（斎藤氏）のことが彫りこまれているのは、垣内先生の刻まれた感銘からしても、自然であり、必然であるように思われる。

右の文章には、「すべてにつけて信州の山水は深く魂の底に刻みつけられて居る。」（同上誌、八二ページ）とある。これについて思い合わされるのは、長野講演「国語教授と国語教育」の末尾に近く、「全県を通じて、生徒がいかにもはきはきしている事は、私の心から有難く思った所でありました。此の生徒のよい心がまえは、山秀で水清き環境からも、自然に養われる事と考えますが、平素の指導に帰すべきものが多いことと思います。」（傍線、引用者。）（有朋堂版「国語の力」、三二五ページ）と述べられている一節である。

なおまた、長野講演「国語教授と国語教育」においては、本論への導入部分に、つぎのような話が巧みに織りこまれている。

「茲になお一つの話を挿みますが、私が始めて長野市に入りました時、一日、御用を終りましてから、小山先生と城山館に登りまして、未だ夕日の光の残って居る善光寺平を俯瞰し、澄みきった秋の空の下にくっきりと見える、あの山この森を指されつゝ、先生から川中島戦争の話しを承りまして、極めて興味深く覚えました。夜の明けない前に妻女山を下って、川中島に向った謙信の深謀が、勝敗を決する原因であったように、国語教育の素因は教授作用の根柢となる教材の探究に於て定まるものと云ってよいのであります。併しながら、謙信がその計画を貫徹するために、迅速に勝敗を決しようとしましたのは、その作戦の結果に就いての予感から導かれたのである如く、教授の結果に関する考慮が加わらなければなりますまい。形の上に現われたところでは、その考えから現われた戦斗のみ目につきますが、その内面に於ける意図を透視する時に、始めてその戦争の全体が理解されるように、教授の方法も亦その内面的なる意図を見る時に始めて理解し得るのでありましょう。」（有朋堂版「国語の力」、二九五ページ）（傍線、引用者。）

「国語の力」所収、一　解釈の力　に引用されている山岳写真の名人の苦心に関する話の扱いかたは、長野講演における、この川中島戦の扱いかたと軌を一にしている。体験・行動の事例にこもっている心理機動を明確に析出して、それを国語・文学の研究過程などの究明に資していく方法は、垣内先生の独自の方式といえよう。

「国語の力」　一　解釈の力　一九　思索的批評法　の第一段は、つぎのように述べられている。

「天文学者が克く空に輝く星を見得るのは、唯見る力に依らねばならぬといった。[1] ニュートン[2]、ケプレルが天体の運行を見て敬虔の念に打たれたと伝えらるゝのを見れば彼等の眼底には宇宙を統一する力が映って居た。カント[3]が星の光の輝く天と心の中の至上律とを並べていった時に彼の心底には人性を統率する原理が儼存して居た。又、[4]山岳撮影の名人が山骨を撮し取るのは一瞬の機微を促える心力であるといった。[5]雪舟が山容を一揮して連互せる洪嶽を彷彿たらしめる時、彼は心を平にして彼の胸中に蔵めた亜細亜大陸の雄大なる光景を雲煙模糊の中に眺めたとも伝えられる。文の上に現われた形象を捉えて、文の上に輝く光や力を見るならば、どうしても其の内面に於ける統率概念に想い到らずして已むことはできぬ。思索的批評法の生るゝのはこの已むに已まれぬ要求があるからである。而して批評を進めて文学の本質の中に内存する原理を索め、これによりて批評法を基礎づけんとする要求を生ずるのである。」（有朋堂版「国語の力」、五一～五二ページ）

ここでは、五つの事例が簡明に述べられ、さきにくわしく引用されていた、山岳撮影の名人の話は、四つめに的確に位置づけられている。名人（斎藤氏）から直接に聴取したものではないにしても、垣内先生がじきじき日本アルプスの麓の町で聞かれた話であるだけに、この話はその場所を得て、生彩を放っている。

「丘上雑記」の前掲の文章にも、「名人の体験を聞くことを何よりも悦ぶ自分は」（同上誌、八一ページ）とあるように、熟達の心境を聞き、そこからさまざまの示唆・触発を受けられたようである。

「国語の力」成立に際して、その一要素をなしている、体験本位（直接・間接を含む。）の事例の問題は、その小さささのゆえに看過してはならない。引用されている多くの事例の中でも、右に見た、山岳写真の名人の話は、その出所・性格からして、「国語の力」成立にゆかり深く、垣内先生好みの、独自の事例の一つと見られる。

一一

「国語の力」の二　文の形　のうち、八「芸術的摂理」において、垣内松三先生は、「芸術的摂理」という語について、まず、「モウルトンの比喩的にいうこの用語の意味は、彼が

説明するごとくHuman interestであり、又Movementでもある。」（有朋堂版「国語の力」、一〇四ページ）と説明し、志賀直哉の作品「城の崎にて」から、「自分は別にいもりを狙わなかった。ねらっても迎も当らない程、ねらって投げる事の下手な自分はそれが当る事などは全く考えなかった。石はコッといってから流れに落ちた。石の音と共に同時にいもりは四寸程横へ飛んだように見えた。いもりは尻尾を反らして高く上げた。自分はどうしたのかしらと思って見て居た。最初石が当ったとは思わなかった。いもりの反らした尾が自然に静に下りて来た。するとひぢを張ったように傾斜にたえて前へついていた両の前足の指が内へまくれ込むといもりは力なく前へのめってしまった。尾は全く石へついた。もう動かない。いもりは死んで了った。自分は飛んだ事をしたと思った。虫を殺す事をよくする自分であるがその気が全くないのに殺して了ったのは自分に妙ないやな気をさした。」という部分を引用していられる。

そうして、「この文にゲナングの考えを適用しようとしても当て篏まらぬように、この文には文学的建築という如き人工的加巧を消したHuman interest. Movementがある。」（有朋堂版「国語の力」、一〇五ページ）と述べ、つぎに、菊池寛の「文芸往来」から、その志賀直哉論を抄出していられる。

「菊池寛氏の批評論の中に、『[1]志賀氏の作品の力強さは志賀氏の作品の底に流れて居る氏の道徳のためではないかと思う。氏の懐いて居る道徳は人間性の道徳だと自分は解して居る。が、その内で氏の作品の中で最も目に着くものは正義に対する愛（Love of justice）ではないかと思う』といい又[2]『志賀氏の作品の背後には、志賀氏の人格があると云った方が一番よく判るかも知れない。そして作品にある温味も力強さも、此人格の所産であると云った方が一番よく判るかも知れない。』[3]『氏はその手法と観照に於ては、今の文壇の如何なる人道主義者よりも、もっと人道主義的であるように思われる』（文芸往来）と謂われたのは、亦この作品の批評にも代えることができる。」（有朋堂版「国語の力」、一〇五～一〇六ページ）

垣内松三先生は、このように引抄してのち、八　芸術的摂理の節を、「モウルトンが『文学的建築』と『芸術的摂理』とは同時に『プロット』であり、『プロット』と『動機』とは一つであると見るのは、文を機械的皮相的に分析しないで、その内面に於ける形象に於て見んとするものである。」（有朋堂版「国語の力」、一〇六ページ）と結んでいられる。

さて、菊池寛の「文芸往来」は、大正九年六月一日、アルスから刊行された、四六版、二七八ページの文芸評論・随想などの集である。菊池寛は、本書の序において、その意図するところを、つぎのように述べている。

「茲に蒐めたものは、自分が此の数年来、その折々の感興

に依ってかいた随筆、文芸評論、劇論、研究飜訳の類である。自分が文芸に対する解釈や、態度は、之等の文章の随処に現われて居るだろうと信ずるのである。百姓の道の要義を説いたものが、『百姓往来』である如く、商売上の心得を書いたものが『商売往来』であるが如く、自分の此の集も、文芸の本義を説き趣味を養う点に於て、一個の『文芸往来』であることを信ずるのである。自分の創作を愛読して下さる人々には、殊に多くの興味があることを信じて居る。三四年前にかいたものには、現在の自分としては、修正したいことや、書き加えたいことがあるが、敢てその侭にして置いた。シング論及びゴルスワアジイの研究は、自分として是非一読して貰いたいものである。創作集は、もう五六篇も世に出した自分ではあるが、こうした随筆評論集の世に出づるとは、又更に特種な欣びを感ずる。それに付けても自分は、自分のかいた物を愛読して下さる人々に感謝の意を表せざるを得ないのである。」

菊池寛は、この「序」を、大正九年五月廿六日、中富坂にて、記している。この「序」によって、「文芸往来」という書名の由来も、またその処女論集であることも、その意図の所在も、承知することができる。

「文芸往来」は、つぎの四部から構成されている。

Ⅰ　感想小品随筆

1　漱石先生と我等
2　晩年の上田敏博士
3　短篇の極北
4　南蠻誓詞
5　長崎への旅
6　芸術家と後世
7　文芸閑談（一）
8　文芸閑談（二）
9　文芸閑談（三）
10　文芸閑談（四）

Ⅱ　劇論演劇論

11　劇曲家としての武者小路氏
12　劇及び劇場に就て
13　愛蘭土劇紹介
14　演劇私議
15　シング論
16　ゴルスワアジイの社会劇

Ⅲ　文芸評論

17　志賀直哉氏の作品
18　浪漫主義の本質
19　批評家の権限
20　印象批評の弊
21　広津和郎氏に
22　芸術と天分

23 ある批評の立場
24 文芸時評（一）
25 文芸時評（二）
26 文芸時評（三）

Ⅵ 飜訳

27 スフキンクスの胸に居るクレオパトラ（ショオより）
28 猿の手（ウヰリアムゼイコップス）
29 ルーベン伯父（セルマラゲルノフ）

多彩な内容というべきである。これらのうち、「国語の力」に引用されている論は、Ⅲ 17 志賀直哉氏の作品からである。

菊池寛のこの文芸評論「志賀直哉氏の作品」は、五節から成る。

その第一節において、菊池寛は、論の意図を、まず述べている。

「自分は現代の作家の中で、一番志賀氏を尊敬して居る。尊敬して居るばかりでなく、氏の作品が一番好きである。自分の信念の通に云えば、志賀氏は現在の日本の文壇では、最も傑出した作家の一人だと思って居る。

自分は、『白樺』の創刊時代から志賀氏の作品を愛して居た。夫から六、七年に成る。その間に、自分は且つて愛読して居た他の多くの作家（日本と外国とを合せて）に、幻滅を感じたり愛憎を尽かしたりした。が、志賀氏の作品に対する自分の心持丈は変って居ない 之からも変るまいと思う。

自分が志賀氏の作品に対する尊敬や、好愛は殆ど絶対的なもので従って自分は此の文章に於いても、志賀氏の作品を批評する積はないのである。志賀氏の作品に就いて自分の感じて居る事を、述べて見たい丈である。」（「文芸往来」、一五一ページ）

菊池寛は、また、この評論の末尾に「兎も角、自分の同時代の人として志賀氏が居ると云う事は、如何にも頼もしく且つ欣ばしい事だと自分は思う。」「最後に一寸云って置くが、自分は此文章を、志賀氏の作品に対する敬愛の意を表する為にのみ書いたのである。」（「文芸往来」、一五九ページ）とも記していて、論評というよりは、讃歌というに近いことをうかがわせる。

第二節において、菊池寛は、志賀直哉のリアリズムの鋭さ・きびしさを、つぎのように指摘する。

「志賀氏は、その小説の手法に於いても、その人生の見方に於いても、根底に於いてリアリストである。此の事は、充分確信を以て云ってもいゝと思う。が、氏のリアリズムは、文壇に於ける自然派系統の老少幾多の作家の持って居るリアリズムとは、似ても似つかぬように自分に思われる。先ず手法の点から云って見よう。リアリズムを標榜する多くの作家が、描かんとする人生の凡ての些末事を、ゴテゴテと何等の

撰択もなく並べ立てるに比して、志賀氏の表現には厳粛な手堅い撰択が行われて居る。志賀氏は惜しみ過ぎると思われる位、その筆を惜しむ。一措も忽にしないような表現の厳粛さがある、氏は描かんとす事象の中、真に描かねばならぬ事しか描いて居ない。或事象の急所をグイグイと書く丈である。本当に描かねばならぬ事しか描いて居ないと云う事は、氏の表現を飽く迄も、力強いものにして居る氏の表現に現われて居る力強さは簡素の力である。厳粛な表現の撰択から来る正確の力強さである。」（「文芸往来」、一五二ぺ）

ついで、菊池寛は、志賀直哉の作品に例をとりながら、その表現について説明を加えていく。

1　「好人物の夫婦」から

「深い秋の静かな晩だった。沼の上を雁が啼いて通る。細君は食卓の上の洋燈を端の方に引き寄せて、其の下で針仕事をして居る。良人は其傍に長々と仰向けに寝ころんでぼんやりと天井を眺めて居た。二人は長い間黙って居た」

――「何と云う冴えた表現であろうと、自分は此数行を読む度に感嘆する。普通の作家なれば、数十行乃至数百行を費しても、こうした情景は浮ばないだろう。所謂リアリズムの作家にこうした洗練された立派な表現があるだろうか、志賀氏のリアリズムが、氏独特のものであると云う事は、こうした点からでも云い得ると思う。氏は、此数行に於て、多くを描いて居ない。而も、此数行に於いて、淋しい湖畔に於ける夫婦者の静寂な生活が、如何にも潑溂として描き出されて居る。何と云う簡潔な力強い表現であろう。こうした立派な表現は、氏の作品を探せば何処にでもあるが、もう一つ『城の崎にて』から、例を引いて見よう。」（「文芸往来」、一五三ぺ）

2　「城の崎にて」から

「自分は別にいもりを狙わなかった。……虫を殺す事をよくする自分であるがその気が全くないのに殺して了ったのは自分に妙ないやな気がした」

――「殺されたいもりと、いもりを殺した心持とが、完璧と云っても偽ではない程本当に表現されて居る。客観と主観とが、少しも混乱しないで、両方とも、何処迄も本当に表現されて居る。何の文句一つも抜いてはならない。また如何なる文句を加えても蛇足になるような完全した表現である。此の表現を見ても分る事だが、志賀氏の物の観照は、如何にも正確で、澄み切って居ると思う。此の澄み切った観照は志賀氏が真のリアリストである一つの有力な証拠だが、氏は此の観照を如何なる悲しみの時にも、欣びの時にも、必死の場合にも、眩まされはしないようである。」（「文芸往来」、一五四ぺ）

3　「和解」から

「『えゝ』と自分は首肯いた。それを見ると母は急に起上

って来て自分の手を堅く握りしめて、泣きながら『ありがとう。順吉、ありがとう』と云って自分の胸の所で幾度か頭を下げた。自分は仕方がなかったから其頭の上でお辞儀をすると丁度頭を上げた母の束髪へ口をぶつけた。」

――「と、描いてある所など、氏が如何なる場合にも、そのリアリストとしての観照を曇らせない事を充分に語って居る。」（「文芸往来」、一五四ページ）

右に掲げた、引用されている三つの作品の文章表現については、簡明ながら、的確に述べられている。三つの中では、2「城の崎にて」のそれがいちばん強く述べられている。「国語の力」に引用されている部分と、この2の部分とは、全く同じなのである。

さて、菊池寛は、この評論「志賀直哉氏の作品」の第三節において、さらに志賀直哉の半面について、つぎのように述べて、論を進展させていく。

「志賀氏の観照は飽く迄もリアリスチックであり、その手法も根底に於いてリアリズムである事は、前述した通だが、夫ならば全然リアリズムの作家であろうか。自分は決してそうは思わない。普通のリアリストと烈しく相違して居る点は、氏が人生に対する態度であり、氏が人間に対する態度である。普通のリアリストの人生に対する態度人間に対する態度が冷静で過酷で、無関心であるに反しても、ヒューマニチックな温味を持って居る。氏の作品が常に自分に、清純な快さを与えるのは、実に此の温味の為である。氏の表現も観照も飽迄リアリスチックである、がその二つを総括して居る氏の奥底の心は、飽迄ヒューマニスチックである。氏の作品の表面には人道主義など云うものは、おくびにも出て居ない。が、本当に氏の作品を味読する者に取って、氏の作品の奥深く鼓動する人道主義的な温味を感ぜずには居られないだろう。世の中には、作品の表面には人道主義の合言葉や旗印が、山の如く積まれてありながら、少しく奥を探ると、醜いイゴイズムが蠢動して居るような作品も決して少くはない。が、志賀氏は、その創作の上に於て決して愛を説かないが氏は愛を説かずしてたゞ黙々と愛を描いて居る。自分は志賀氏の作品を読んだ時程、人間の愛すべきことを知ったことはない。」（「文芸往来」、一五四～一五五ページ）

菊池寛は、ここで、志賀直哉の短篇作品「老人」を例として、志賀リアリズムの持っているヒューマニスチックな温味を説く。

第四節に至って、論はいっそう深まっていく。志賀直哉の作品の底流・背景について、とくに「道徳」について、掘り下げていくのである。第四節の全文は左のようであり、「国語の力」への引用は、1・2・3とも、ここからなされていた。その部分を傍線で示すと、つぎのようである。

氏の作品が、普通のリアリズムの作品と違って一種の温か

みを有して居る事は、前に述べたが、氏の作品の背景はたゞ夫丈であろうか。自分は、夫丈だとは思わない。氏の作品の頼もしさ力強は、氏の作品を裏付けて居る志賀直哉氏の道徳ではないかと思う。

自分は、耽美主義の作品、或は心理小説、単なるリアリズムの作品にある種の物足らなさを感ずるのは、その作品に道徳性の欠乏して居る為ではないかと思う。ある通俗小説を書く人が「通俗小説には道徳が無ければならない」と云ったと云う事を耳にしたが、凡ての小説はある種の道徳を要求して居るのではないか。[1] 志賀氏の作品の力強さは志賀氏の作品の底に流れて居る氏の道徳の為ではないかと思う。

氏の懐いて居る道徳は「人間性の道徳」だと自分は解して居る。が、その内で氏の作品の中で、最も目に着くものは正義に対する愛（Love of justice）ではないかと思う。義しさである。人間的な「義しさ」である。「大津淳吉」や「和解」の場合には夫が最も著しいと思う。「和解」は或る意味に於て「義しさ」を愛する事と、子としての愛との恐るべき争闘とその融合である。が、「和解」を除いた他の作品の場合にも、人間的な義しさを愛する心が、随処に現われて居るように思われる。

が、前に云った人道主義的な温味があると云うのも、今云った「義しさ」に対する愛があると云う事ももっと端的に云えば、[2] 志賀氏の作品の背後には、志賀氏の人格があると云った方が一番よく判るかも知れない。そして作品に在る温味も力強さも、此人格の所産であると云った方が一番よく判るかも知れないと思う。

志賀氏の作品は、大体に於いて、二つに別つ事が出来る。夫は氏が特種な心理や感覚を扱った「剃刀」「児を窃む話」「苑の犯罪」「正義派」など、氏自身の実生活により多く交渉を持つらしい「母の死と新しい母」「憶ひ出した事」「好人物の夫婦」「和解」などゝの二種である。志賀氏の人格的背景は、後者に於いて濃厚である。が前者も、その芸術的価値に於いては決して後者に劣らないと思う。[3] 氏は、その手法と観照に於ては、今の文壇の如何なるリアリストよりももっと、リアリスチックであり、その本当の心に於いて、今の文壇の如何なる人道主義者よりも、もっと人道主義的であるように思われる。之は少くとも自分の信念である。（「文芸往来」、一五七～一五八ページ）

第四節は、五段落から成っているが、「国語の力」への引用文は、引用1が段落二・三から、引用2が段落四から、引用3が段落五から採られている。要をえた引用というべきである。1・3とも、それぞれ適切に切ってある。1を、「義しさである。」の前で切り、3を、「之は少くとも自分の信念である。」の前で切っているのなどは、むだのない引用であろう。

「国語の力」においては、1・2・3の引用につづけて、「と謂われたのは、亦この作品の批評にも代えることができる。」（有朋堂版「国語の力」、一〇六ぺ）と述べてある。「城の崎にて」からの本文引用は、「文芸往来」のばあい、第二節においてなされ、その批評もそこにおいてなされている。引用1・2・3は、第四節に、志賀直哉の「道徳」論として述べられているところから引かれたのであって、これら1・2・3は、直接の「城の崎にて」の作品批評ではない。それゆえ、垣内松三先生は、「と謂われたのは、亦この作品の批評にも代えることができる。」と述べられたのである。用心深い述べかたでもある。

菊池寛の論の第五節では、短篇の名手としての志賀直哉について、つぎのようにいう。

「志賀氏は、実にうまい短篇を書くと思う。仏蘭西のメリメあたりの短篇露国のチエホフや独逸のリルケやウキードなどに劣らない程の短篇を描くと思う。之は決して自分の過賞ではない。自分は鷗外博士の訳した外国の短篇集の『十人十話』などを読んでも、志賀氏のものより拙いものは沢山あるように思う。日本の文壇は外国の物だと無条件でいゝ物として居るが、そんな馬鹿な話はないと思う。志賀氏の短篇などは、充分世界的なレヴエル迄行って居ると思う。志賀氏の作品から受くる位の感銘は、そう横文字の作家からでも容易には得られないように自分は思う。短篇の中でも、『老人』は原稿紙なら七八枚のものらしいが、実にいゝ。説明ばかりだが実にいゝ（説明はダメ飽く迄描写で行かねばならぬなどゝ云う人は一度是非読む必要がある）『出来事』もいゝ。何でもない事を、描いて居るのだがいゝ。『清兵衛と瓢箪』もいゝと思う。

志賀氏の作品の中では『赤西蠣太』とか『正義派』などが少し落ちはしないかと思う。

色々まだ云いたい事があるが、此処で止めて置こう。兎も角、自分の同時代の人として志賀氏が居ると云う事は、如何にも頼もしく且つ欣ばしい事だと自分は思う。

最後に一寸云って置くが、自分は此文章を、志賀氏の作品に対する敬愛の意を表する為にのみ書いたのである。」（「文芸往来」、一五九ぺ）

菊池寛のこの論は、志賀氏への敬愛に発することを、第一節・第五節の首尾において明らかにし、

第一節　考察の立場――前おき
第二節　志賀作品のリアリズムの特質
第三節　志賀作品のヒューマニズムの特質
第四節　志賀作品の底流としての「道徳」
第五節　志賀の定位――むすび

論を堅密に展開させ、みごとな構成をし、志賀作品の特質を論究しえている。

「国語の力」への引用は、菊池寛の志賀論のうち、最も深

く掘り下げたところから、三つをまとめて、それを作品の例示に結びつけて、活用するようにくふうしてなされている。

垣内松三先生は、「芸術的摂理」を説くのに、志賀直哉からの具体例ならびに志賀自身の文学活動の分析をもってするように試みられたのである。その際、菊池寛の「文芸往来」所収の、この論にヒントを得られたのであろう。ヒントを得て活用されるようになるのには、菊池寛の志賀直哉論の、当時として、みごとな構成と周到さ・鋭さに触発された、深い感銘が存したであろう。

菊池寛の「志賀直哉氏の作品」は、大正七年十一月に執筆されたものである。垣内先生が単行本「文芸往来」に収められたもののみを読まれたか、発表当時にも読まれたか、それは明らかでないが、垣内松三先生の論文読みの鋭さが、この「芸術的摂理」の節の引用にはうかがえるようである。さりげない引用のごとくであって、眼光のただならぬものがこちらに反射してくるようである。

「国語の力」の成立には、垣内松三先生のこのような読み深めならびにそこからの理論・実際両面への摂取・活用があったと考えられる。

（昭和40年7月13日稿、うち一部、
昭和39年7月19日稿）

（本学助教授）